

線量は毎時六・五マイクローシールト 防護服着て
墓洗ふ人 本田一弘

「防護服着て墓洗ふ人」が衝撃的である。異常である。一首が喚起する映像もシヨッキングだ。毎時六・五マイクローシールトが人間にとつてどのくらい危険な数値なのか私には分からないが、「五マイクローシールトで緊急事態宣言規制委、基準を厳格化」という記事をネットに見つけた。これを見るとかなり危険な数値らしい。

恐ろしい声上げながら道あけるお化け屋敷の幽霊の
礼儀 佐佐木定綱

「お化け屋敷の幽霊の礼儀」という意表をついたフレーズで、ユーモアを前面に出した一首。攻めてくるふりをしながら、お客さまのための逃げ道をあけている、というのだ。クールな視点がユーモアを生んでいる。

自らの名札に抱かれ公園の木々はわれらのように寂
しい 武藤義哉

私たちは生まれてすぐに名前をつけられ、一生その名前とともに生きることを求められる。名前無しのただの一人として自由に、国民でもない、家族の一員でも無い日々を生きてはまずできない。この「寂しさ」は、そんなあてがい扶持を生きざるをえない寂しさだろう。第一、一句の工夫された表現に注目。

葉を落とし小枝を落とし大切をのこさむとして我の
ずたずた 山本陽子

第四句までが、「我のずたずた」を起こす序詞になつ

短歌の現在

No.392 今月の16首を読む

佐佐木幸綱

ている。剪定をする樹木のイメージが、最後まで来て急ブレーキをかけたように、一気に「我のずたずた」に転換するそのスリルが持ち味。

日が落ちる 落ちきるまでの砂浜に妻の見る海我の
見る海 三宅徹夫

夕暮れの砂浜で海の入りを見守る夫婦のしばらくの時間。見るものと見ている時間を共有するふたり。当然のことながら、しかし、それぞれが心に広げる波紋の大きさや濃淡は違う。「妻の見る海我の見る海」がうまい。

秋団扇しまわずにある子規旧居わがあとに来し人も
手に取る 吉田暉

俳句の季語に「秋扇」「秋団扇」がある。秋めいてきてもまだしまわれない扇や団扇のことで、夏の余韻、夏の名残のニュアンスである。子規忌（九月十九日）に子規庵をたずねた一連中の作で、俳人正岡子規にちなんで、あえて冒頭に季語を置いている。「も」が利いている。

スポツトの下を移るふ今の人の影の水母のごとく浮
きをり 岡田恵美子

この一首だけだと「今の人」が分かりにくい。フランスの中世のタピストリーの展覧会をうたった一連中であり、「今の人」は中世の展覧会を見に来た現代の人の意味である。部屋には中世の空気が満ちていて、現代の人々は異次元で踏みこんだ感じなのだ。困難な表現に果敢に挑戦した一首と読む。

野良猫の多き街なり東京のさみしい隙間を猫が出入